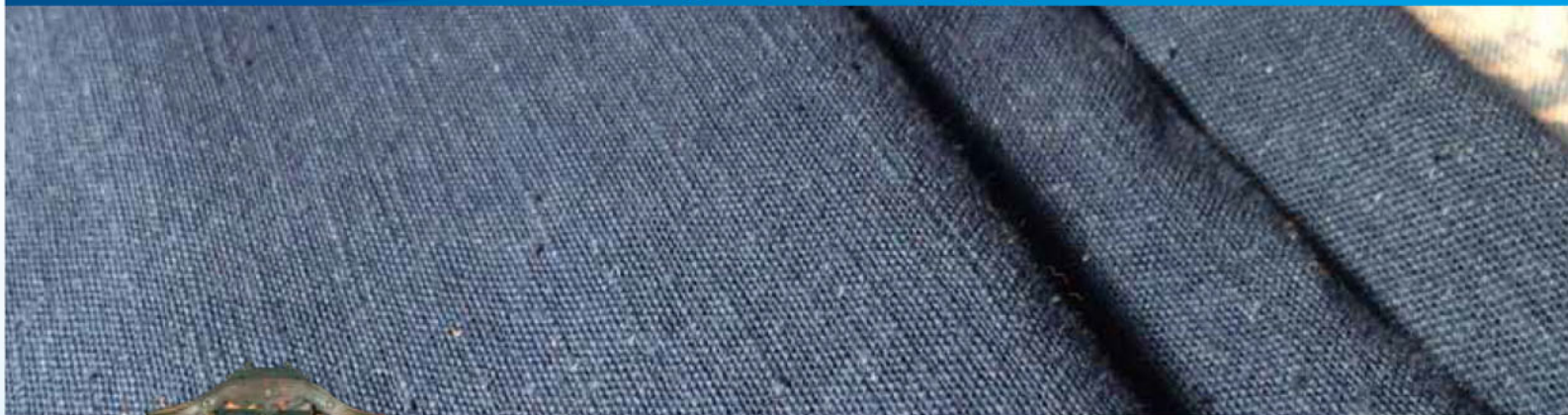




## 南アルプス ブルー 藍が彩る市の歴史



上：数世代使われた藍甕(あいがめ)とその内側／下：藍染の暖簾(のれん)井上染物店

### ふるさと文化伝承館エントランス展示 色の魅力～市内を彩った色の歴史～

9月12日～平成27年1月14日 入館無料  
縄文時代から現代まで、色の歴史や技術がわかります。  
明治時代の「武者のぼり」など貴重な資料を初展示！

する「藍屋」を営んでいました。明治初期二代目藍屋の浅野長右衛門(あさのちやうえもん)が旧武川村実相寺に立ち寄った際、神代桜に感動して詠んだ詩が桜の片隅に石碑として残されています。明治中期以降、輸入された化学染料の普及とともに紺屋は姿を消します。しかし古市場の井上染物店では現在でも伝統的な藍染が引き継がれています。また西郡(にしごおり)の木綿の復活を目指している湯沢地区南アルプスコットン倶楽部では、藍染体験などの取り組みを始めています。かつて人々の生活を彩った藍。藍はその濃淡や他の触媒と合わせることでさまざまな青を生み出しました。その色は南アルプスの山々やその上に広がる青空につながります。伝統的な藍染めの青はここにしかない歴史と物語を染め重ねてきた「南アルプスブルー」とも呼べる色だったのです。



紺屋では「あいぞめ」の音から「愛染明王(あいぜんみょうおう)」を信仰していました。寺部の紺屋だった塚原家には愛染明王のお札を記った厨子が残されています。



川上の浅野家に残る「すくも」をついて藍玉を作るための石臼

藍で染められた紺色は明治初期に來日した英人研究者によつて「ジャパンブルー」と称えられ、現在では日本を代表する色となりました。市内でも江戸時代から明治時代中ごろまで広く藍が栽培され、「紺屋(こうや)」と呼ばれる藍染屋がいくつも存在していました。藍染めに使われる蓼藍(たであい)は奈良時代以前に中国からもたらされ、平安時代の「延喜式(えんぎしき)」には藍染めの方法が記されています。この頃の藍染めは刈り取ったばかりの藍の葉を使う夏季限定のものでした。それが室町時代になると、藍の葉を発酵させて染める「藍建染め(あいだてぞめ)」と呼ばれる技術が確立し、これによつて一年中染められるようになりました。江戸時代には木綿が庶民の普段着に普及すると合わせ、藍は武士だけでなく庶民の染料として広く使われるようになります。県内有数の木綿の産地であった市内にも藍染めが普及していき、水の豊富な若草地区や甲西地区を中心に「紺屋」が営まれました。その一方川上の浅野家は、県内外から藍葉を集めそれを発酵させて「すくも」を作り、さらに石臼でつき固めた藍玉(あいだま)を県内各地に販売しました。

文・資料／文化財課 電話(2002)72609